

## 歴史家 遠山茂樹と〈東アジア〉歴史像

板垣雄三

まえおき 1・2

I ブレークスルーとしての遠山の〈東アジア〉

II 遠山の学問をどう記念し継承するか

III 大震災・原発事故のもとでの歴史「学」

おわりに

本稿は、もともと個別論文として書いたものではない。シンポジウム「遠山史学と歴史学の現在」(2012年1月21日、東京)の際の配布資料「遠山さんと〈東アジア〉歴史像」として用意した文書に基づくものであり、口演資料の性格を随所に留めているが、あえてそのままとした。歴史家遠山あるいは歴史家集団としての歴史学研究会と筆者(板垣、以下では私)自身とのかかわりをも意図的に織り込んだ、ある種の歴史的証言である。

まえおき 1 1989年と2011年

これら二つの年について、深い感懐を覚える。1989年[天皇代替わりによる戦責問題の「生物学的解消」、ベルリンの壁崩壊・東欧革命、天安門事件]と2011年[ムワティン(市民)革命の世界的拡大、フクシマ核災害・東日本大震災]とは、時代の転換(終わり始まり)の目印であるとともに、2人の歴史家、江口朴郎(1911-89)と遠山茂樹(1914-2011)が、それぞれ世を去った年だった。歴史学研究会委員長が江口から遠山へと受け継がれた(1962年)ことが暗示するように、コンビ(意味のある組み合わせ)を成していた歴史家2人の存在の意味を、2011年(板垣雄三「人類が見た夜明けの虹—地域からの世界史・再論」、『歴史評論』741号[2012年1月号]、参照)を経たいま、あらためて考えなおすという地点にわれわれは立っているからだ。

\*遠山茂樹「解説」、『江口朴郎著作集』第1巻(歴史学の課題と理論)、青木書店、1974年。

\*板垣雄三「第三世界をめぐって—江口さんの学問構築を内から支えたものについて考える」、江口朴郎先生追悼集編集委員会編『思索する歴史家・江口朴郎—人と学問』青木書店、1991年。

まえおき 2 戊辰戦争(奥羽越列藩同盟の東北戦争)、自由民権運動(自由党、福島事件・加波山事件・秩父事件)、松川事件(被占領・従属システムと社会を方向づける謀略の影)

私は2011年夏以降、市民決起・脱原発運動のグローバル化を観察しながら、歴史におけるシンクロニシティ(共時性)とコンテクスト変換とに関する考察をさらに一歩進めて、東北・関東・沖縄などの民権運動の歴史に言及するようになった(シンクロニシティと1979年-1986年-2011年の組み合わせについては、板垣「中東の新・市民革命をいま日本から見、そして考える」、『世界』[岩波書店]2011年6月号所載。また、コンテクスト再構成については、掲掲「人類が見た夜明けの虹」、『歴史評論』741号)。

こうした関心から、以下の諸発言・提起・事象に注意を払っておきたい。

・遠山茂樹「壮大な民権展に期待」、『福島県]三春町歴史民俗資料館・自由民権記念館『土佐と結ぶ自由民権運動』[同展カタログ]、1986年[遠山の〈地域〉への姿勢の一端が窺える]。

「……自由民権百年全国集会の運動は……全国各地の団体の御努力によって大きな成果をあげ……新しい史料と史実が次々と発見され……地域住民の方々の自由民権運動にたいする考え方も発展した。しかし同時に地域と地域との関係を検討する必要が痛感された。……地域に根をおろしながら、地域をこえて、全国的に連絡・連合したところに、自由民権運動の真骨頂があった[から]。……西

の高知県、東の福島県は、運動の先進地域であり、後進地域は先進地域によって刺激され、指導されて、運動を出発させた。だが後進地域の運動が発展し、先進地域と異なる地域的特色をもつようになると、先進と後進の関係は逆転し先進地域は後進地域の特色に影響され、それに学ぶこととなる。[三春と会津の例、高知と東京の例を挙げる]各地の運動は結びあうことで、運動は量・質ともに発展した。日本国民がはじめて自主的な全国組織-政社連合や政党をもった[。]……いかに多くの運動者が往来したか、新しくできた新聞や雑誌がいかに遠隔地の運動状況を報道したか、眼を見張ることである。……結びあい、影響しあいの具体的史実の究明は、むしろこれからの課題で……[この特別展は]新しい研究動向のさきがけ……。三春は土佐と結びつくことによって、……全国各地に関係し呼応しあう壮大な姿を明らかにするにちがいない。……」

・色川大吉「国民的遺産として」[同カタログ]こちらは、加波山事件の概とその意義に注目する。

・林基(1914-2010)[長野県]青木村歴史文化資料館義民資料室「林基文庫」の開設[一揆・民権運動関係の蔵書を展示、閲覧に供する]。林基「加波山事件七十周年」、『歴史評論』59号[1954年9月]。野島幾太郎(林基・遠藤鎮雄共編)『加波山事件—民権派激挙の記録』平凡社[東洋文庫]、1989年。

・西川純子「福島自由民権と門奈茂次郎」1~14[連載]、『評論』(日本経済評論社)No.177-186、2010年2月~12年1月[福島の民権家として活躍し加波山事件に連座して獄舎につながれた祖父の足跡とその時代を、歴史家として描きだす評伝]。遠山シンポに参加し、この連載に関する情報を教えてください西川氏に、感謝する。

・経産省前テントひろば「テント日誌」blog(<http://tentohiroba.tumblr.com>)などさまざま[いのちを育む女性・母という主体の意識と意味とが發揮される]。

・福島第一原発からの拡散による放射能汚染の全国地図(<http://kipuka.blog70.fc2.com/>)[民権運動の激化諸事件と関連深かった地域が、現在ことさら強い放射線の影響を受けている地域と、偶然とはいえ不思議に重なり合うように見える]。上記地図について「火山ブログ」の早川由紀夫氏に感謝する。

・遠山茂樹「明治初年の琉球問題」,新里恵二編『沖縄文化論叢』第1巻,平凡社,1972年。なお、服部

之総『明治維新史』(上野書店,1929年,再版:三笠書房,1948年)の幕末-維新の政治的諸段階終期[第6期1874-79年]における「琉球処分」着目に注目し、注意を喚起したのは、田中彰「明治維新」、『北海道大学人文科学論集14』1977年3月[36頁注]。

以上をまえおきとして、本論に進むことにしたい。

## I ブレークスルーとしての遠山の〈東アジア〉

—私の〈地域〉論構築との関係—

1963年の遠山による〈東アジア〉歴史像の提起は、転換点としての意味を持った。以下では、それを準備したものと、提起の意義、受けとめられ方を検証していく。

## a) 19世紀東アジアと Western Impact についての自主的研究会(1951年,史料編纂所)

この研究会には遠山に招かれ、山極晃、桂圭男、板垣ら、東大文学部西洋史学科の学生たちが参加した。(遠山がこの取り組みを始めたのは、おそらく井上清に「かみつかれた」からだったか?)自由貿易と帝国主義との関係への興味は、私の卒論「米国の南北戦争と英国の労働運動」の一つの動機づけとなった。自主的研究会の着眼が「輸入品」でない点に注意。そこではのちに「自由貿易帝国主義」と表現されることになる問題をめぐる議論がいち早くおこなわれていた。

\*遠山『明治維新』(岩波全書),1951年。井上清『日本現代史1 明治維新』東京大学出版会,1951年。J. Gallagher & R. Robinson, *The Imperialism of Free Trade, The Economic History Review 2<sup>nd</sup> Series*, Vol. VI, No.1 (1953)。吉岡昭彦『インドとイギリス』(岩波新書),1975年。毛利健三『自由貿易帝国主義』東京大学出版会,1978年。

## b) 〈東アジア〉歴史像の提起(1963年,歴研大会での遠山報告)

## ▼1959年~63年初頭の問題状況・世相などの背景

1963年大会における遠山報告の背景としては、以下の要因に着目する必要があるだろう:「歴研危機」(単に発行元が代わったという次元ではなく。1957年大会テーマで既に「戦後歴史学の批判的反省」が掲げられざるを得なかったことに注意)、60年安保改定、「近代化」論の

登場、アジア研究へのアジア・フォード財団資金導入問題、学問・思想の自由問題、中央公論社（「風流夢譚」問題に端を発する右翼テロ、『思想の科学』天皇制特集号発売中止）問題、紀元節復活への模索、教科書検定問題、日朝協定による日朝鮮人の北朝鮮帰還事業、中印国境紛争、「アフリカの年」、中ソ論争表面化、韓国軍事クーデタ、キューバ危機、63年部分的核実験禁止条約 PTBT に先立つ60年代初頭の異常な核実験競争、皇太子成婚パレードのTVライブ放送人気、三池争議、大気汚染公害（四日市ぜんそく）、米国原潜寄港問題、など。

#### ▼1959年後半～63年前半の歴史学研究会委員会の取り組み

上記のような状況を前にして、編集・会務体制を強化するとともに、学術全体のなかでの歴史学の再定位を自覚しつつ、会員の研究状況=実態に即した「共同研究」の構築を模索する一方、世界史における「日本の〈近代〉」に関する大小の特集と大会・部会での討議を組織的・集中的にかさねた。芝原拓自「アジア社会の変革と歴史学の任務」（『歴研』253号、1961年5月）および同「明治維新の世界史的位置」（別冊特集『世界史と近代日本』1961年10月所載）、同「ふたたび明治維新の世界史的位置について——遠山・古屋・石井〔孝〕氏の批判にこたえる」（『歴研』272号、1963年1月）は、その過程で産まれた成果の一部分。

#### ▼遠山が、やむなく一肌脱ぐに至った事情

（遠山が歴研のために「一肌脱いだ」前例としては、1962年11月の270号「学問研究の自由と責任」特集のための朝永振一郎インタビューの際のエピソードがある。インタビュー録音失敗が終了1時間後に判明したことが電話で報告されると、すでに帰宅していた遠山編集長は若い委員たちを責めるではなく、みずからの心覚えメモを基に、徹夜でインタビュー記事をまとめた。）63年度大会準備の時間切れギリギリの局面で、板垣・宇野俊一・古屋哲夫の3名が遠山に直談判して報告引受けを頼みこんだ（宇野は現在「記憶なし」と言い、故人古屋は保証人になる由なしだが）。趣旨は、一国史単位の「外圧」（ないし外的要因化された「国際的条件」）論やそれらの国際比較を超克して、資本主義的世界のインテグラル・パート（構成要素）としての〈東アジア〉という「地域」の鳥瞰的・一体的構図とその一環としての日本社会把握の試みとを提案すること

はできないか、ということだった。内と外の二分法を止め、雑然たる一体のなかの局部として観じる。いわば、大塚久雄の「横倒しの世界史」的断面図ではなく、江口朴郎の「<sup>トランスナショナル</sup>国際的契機」論的観点と方法による「日本史」の〈解体〉。前近代については、堀敏一「東アジアの歴史像をどう構成するか」〔近代以前の東アジア世界〕を、すでに引き受けてもらっていた。こうして、遠山「近代史から見た東アジア」（『歴研』276号、63年5月）と同〔63年度大会報告〕「東アジアの歴史像の検討——近現代史の立場から」（『歴研』281号、63年10月）、さらに同「世界史における地域史の問題」（『歴研』301号、65年6月）が産出されることとなった。

#### ▼その後、流布している理解

遠山報告に対する批判として、芝原拓自・藤田敬一「明治維新と洋務運動」、『新しい歴史学のために』（92–93、1964年）が発表され、また、この間の関係論文が幼方直吉・遠山茂樹・田中正俊編『歴史像再構成の課題』（御茶の水書房、1966年）に収録されたこともあり、さらに遠山『明治維新と現代』（岩波新書、1968年）や芝原『世界史のなかの明治維新』（岩波新書、1977年）も現われるので、63年の遠山大会報告はもっぱら「遠山・芝原論争」における所産というコンテクストで理解されているくらいがある。だが、それでは不十分だ。歴史像は副産物なのか。このことは、遠山自身の展開・発展として、明治維新そのものに日本帝国主義という帰結への展望まで開いてみせる『明治維新と現代』の読み方、それへの評価とも、かかわってくるだろう。〈東アジア〉という作業仮説の設定を分水嶺とするような形で、それ以降の遠山の仕事は、新しい飛躍の局面に入ったといえるのではないだろうか。

#### ▼「〈東アジア〉歴史像」提起の効果と評価

遠山報告は、近現代史に限らずより広い範囲で、その後の「日本史」研究のスタンスの変化に影響を与えたと思われる。他方、「日本史」研究のみならず世界史的次元での研究や教育でも、〈東アジア〉という地域設定がいわば自明の枠組みとして受け容れられてしまい、一人歩きするのを、助ける結果にもなったようだ。「日本—東アジア—世界」という同心円の構造への安住を促すのは、問題提起の本来の

ダイナミックな意図に反しているといわなくてはならない。自由な変換・拡張・連結・溶融の可能性こそ、〈地域〉設定の本領でなければならないはず。そんな観察と思索とは、私の「n 地域」着想の一ヒントともなった。

## Ⅱ 遠山の学問をどう記念し継承するか ——「遠山史学」という捉え方の吟味——

a) 学風・作風における自主的規律 批判に耳を傾けるリベラル・柔軟思考の人柄との相関

◆ **ねばりと進化** 遠山は、研究者には「豹変してはならぬ責任」があると説く一方で、「集团的営為のなかでたゆみなく前進」することも重視していた。批判にさらされることを選ぶ自己規律（「どこからでもかかっているらしい」とでもいうような潔さ）+「運動」のなかでの自己批判による進化。その表われとしては、以下のような例が挙げられる。

『明治維新』（岩波全書、1951年）は、井上清（1913–2001）からの批判などに応じた改訂新版（1972年）になったが、それよりはやく『明治維新と現代』（岩波新書、1968年）という展開がすすんでもいた。

いわゆる『昭和史』論争での対応。この論争は現在ではもっぱら歴史叙述のあり方をめぐるものだったかのように受けとめられているが、書物の基本的意図が「戦争をおしすすめる力とこれに抵抗する力との対抗」（新版はしがき）に視点をすえ、敗戦後わずか10年で逆流・反動を生じている「昭和」的現実への批判だったことに注意。かつて「国民の力がやぶれざるをえなかった条件」（初版はしがき）を問題にしながら、「国民の力」を説得的に説明できなかったが、批判の受けとめ方としては、批判に感謝しつつ、新版の構成を「世界と日本」に置きかえる。結局、遠山らとしては、歴史叙述や人間観やメタヒストリーにかかわる問題次元ではなく、現実と向きあう態度の問題だという立場を堅持した（「歴史における偶然性について」〔『思想』1952年2月〕ともつながりあう）。

永久進化は、「維新史研究会」、「科学的歴史学」、「〔画報編集の〕近代史研究会」、「国民的歴史学」、「昭和史論争」、「日教組教研活動」、「紀元節復活問題」、「近代日本にかんする日米箱根会議」、「家永教科書検定訴訟」、「明治百年祭」、「人民闘争史」、「日

本社会の歴史意識と〈戦後〉歴史学についての展望・記述化作業」、「自由民権百年全国集会」、等々で、制度・状況・運動に関与・参加・呼応・対処・対決するというアクチュアルな課題に即して、研究者・市民の集団実践をつうじて、すすむ。

こうした連鎖と持続に幻惑され、周囲も、悪意を秘めた観察者も、〈東アジア〉歴史像の設定の「ターニング・ポイント」性にあまり気づかなかつたし、そして遠山自身も、十分にそれを自覚してはいなかったかもしれない。前掲の民権運動の「先進・後進」の論議にも、それは現われている。『戦後の歴史学と歴史意識』（岩波書店〔日本歴史叢書〕、1968年）、でも、「集团的営為」の守りの姿勢が感じられる。遠山をもってして、「日本史イデオロギー」はそれほどに頑強なのだとも言えよう。

◆ **先学の理論・方法の継承の仕方** マルクス主義歴史学シューレと政治人間<sup>ホモ・ポリテイクス</sup>の作法

遠山は、江口朴郎と同様、多くの人々のあいだで信望あつく、何かと云っては担がれる存在だったが、独立不羈の観ある江口に対して、遠山は異なる「運命」を背負っていたように見える。

服部之総（1901–56）の「講座派」内部批判を買う評価と、羽仁五郎（1901–83）門下であるという自認と、のバランス〔敗戦後まもなく、奈良本辰也（1913–2001）とともに遠山は、服部から「歴史の多彩に対する帰結の貧しさと資料の肥満に対する方法の痩せが露呈」との酷評で激励される。「称名者はつねに念仏者であるのではない」との服部の羽仁評をあえて甘受〕。そして、渡部義通（1901–82）「門下」との協力。

\* 遠山「日本資本主義論争と服部之総」、小西四郎・遠山編『服部之総・人と学問』日本経済評論社、1988年。遠山「解説」、『石母田正著作集』第14巻（歴史と民族の発見）および第15巻（歴史・文学・人間）、岩波書店、1989年および1990年。

イスラームと言うと猫も杓子も「スンニーかシーアか」とあげつらうように、近年は、日本のマルクス主義歴史学と言うと「講座派か労農派か」で二分でき、ついでに日本共産党寄りか否かもわかる、といった短絡思考の割りきり解説が目立つが、それには問題があろう。要は、明治維新以降に形成されてきた「天皇制つき資本主義」の大日本帝国という過

酷な現実肉薄する度合いに応じて（現在から見れば「労農派」に分があるなどという人があるが、当時は、現実逃避の度合いが大きいほど「労農派」向きだった面も無視できないのでは？）、1920～30年代における歴史的・社会的な課題意識のスペクトルが、ファジーに多彩に呈示された、ということだろう。

まして、第二次世界大戦後まで、1930年代の「講座派」がそのまま残存していたわけはなかった。

それをよく示す例として、『社会構成史体系』全5冊（日本評論社、1949-51年）の目次を挙げておこう（中村元や村川堅太郎、林健太郎といった人々も協力していることに注意）。

〔第1〕第1部 日本社会構成の発展〔上〕 封建社会における資本の存在形態（堀江英一）、近世における階級闘争の諸形態（林基）、近世における農民層の階級分化（藤田五郎）、近世における商業的農業の展開（古島敏雄）、〔第2〕第1部 日本社会構成の発展〔下〕 古代末期の政治過程および政治形態—古代世界没落の一考察（石母田正）、明治維新における指導と同盟（服部之総）、政治的社会的の成立（藤間生大）、自由民権と絶対主義（信夫清三郎）、純粹封建制成立における農民闘争（鈴木良一）、〔第3〕第2部 東洋社会構成の発展〔上〕 官人支配と国家的土地所有（平瀬巳之吉）、古代インドの統一国家（中村元）、古代の諸思潮の成立と展開（重沢俊郎）、民国革命（岩村三千代）、宋代官僚制と大土地所有（周藤吉之）、〔第4〕第2部 東洋社会構成の発展〔下〕 東南アジア社会の一類型—インドネシア社会構成史（小林良正）、中国回教社会の構造（岩村忍）、中国古代の帝王思想—特に韓非子の君主論（板野長八）、中国の鄉村統治と村落（清水盛光）、中国農村社会の近代化過程（尾崎庄太郎）、〔第5〕第3部 世界史的発展の法則 アメリカ奴隷制度と近代社会の成長（菊池謙一）、封建的土地所有の成立過程（田中正義）、南北戦争と近代アメリカの確立—上（菊池謙一）、プロシア農業改革とユンカー経営の発展（林健太郎）、羅馬大土地所有制（村川堅太郎）、中世国家の構造（堀米庸三）

また、史的唯物論の解説だったはずの『講座 歴史』全4巻、（大月書店、1955-56年〔第2巻のみ55年〕）は、以下のような構成となる。

第1巻（国民と歴史） 歴史科学と唯物論（石母田正）、歴史における法則（奈良本辰也）、歴史をつくる大衆（藤

間生大）、歴史学の階級性と党派性（岩井忠熊）、歴史と伝統（原田伴彦）、「国民的歴史学」の批判と反省（中塚明、奥田修三）、自然科学の方法と歴史学の方法（井尻正二）／第2巻（科学としての歴史学） 原始・古代史—生産力と生産関係の解明を主として（藤間生大）、中世史—階級闘争の解明を主として（永原慶二）、近代史—階級と民族の解明を主として（遠山茂樹）、現代史—変革の合法則について（板垣雄三）、社会構成（林基）／第3巻（歴史学における諸問題） 平和と戦争（藤谷俊雄）、大衆と英雄（太田秀通）、文化遺産の評価（林屋辰三郎）、愛国心と国際主義（阪東宏）、資料と方法（古島敏雄）、革命的伝統について（松本新八郎）、歴史における科学性について（江口朴郎）、歴史教育（高橋磯一）／第4巻（国民の歴史意識変革の運動） 歴史の把握と叙述（川崎新三郎）、芸術創造と歴史学（角田信夫）、歴史の運動と民話（吉沢和夫）、歴史調査について（杉山博）、民衆と調査（上川淳）、神秘的な歴史観からの解放（佐木秋夫）、国民的科学への考古学の歩み（赤松啓介）、世論における歴史の歪み（松島栄一）

ここでも、時代のシフトとそれへの適応が認められる。

むろん、社会経済史や土地制度史の分野では、敗戦後はやい段階から堀江英一『近代産業史研究』（日本評論社、1948年）、河野健二『絶対主義の構造』（日本評論社、1950年）、藤田五郎『近世封建社会の構造—日本絶対主義形成の基礎課程』（御茶の水書房、1953年）、のように、「講座派」的問題観を発展させる研究が続々と現われたし、世は「大塚史学」全盛で、それがますますそうした空気を支えていた面があったことは、否定できない。高橋幸八郎『市民革命の構造』（御茶の水書房、1950年）、の読まれ方も、そうだった（1945年に引き付けて。このような雰囲気については、あとでまた触れる）。

遠山は、これらの動きを親和的に評価しつつも、「範疇論」的経済史には、「没科学的無方法」の「実証史学」に対してと同様、批判的で、みずからはいわば「全体史」先取りの高次の「政治史」構築を志向していたと見られる。しかし遠山は、『明治維新』の仕事によって、敗戦後の日本でマルクス主義歴史学を代表する歴史家の一人と位置づけられた。

20世紀前半からもちこされた既成の歴史認識枠組

みを、世紀後半の世界のなかで世紀末にかけて、現実の発展に応じてどのように新たに組み替えていくべきか、という課題への応え方として、遠山は〈東アジア〉歴史像という「とっかかり」を提示した。「継承」を重んずるスタンスのために、それほどは気張らずに。新機軸の周りを旋回する途上で、バトンは後続の人々に渡されたのだった。

◆ 立場の違いを超え「協働の公共」をめざす 民主と平和を追求する統一戦線空間

敗戦後、復刊した『歴史学研究』で、遠山の初登場は（松島栄一と共同執筆の書評を除けば）、戦死した原平三（1908-45）と連名の「江戸時代後期一揆覚書」（127号、1947年5月）という論文（戦時下、遠山を歴研に結びつけた人は、原平三だった）。しかし、同時に注目されるのは、飯塚浩二『地理学批判—社会科学の一部門としての地理学』を書評した遠山である（128号、1947年7月）。これに答えるように『歴研』132号（1948年3月）を飾る巻頭論文は、飯塚浩二「遊牧民の制覇と隊商商業」。続いて飯塚は、遠山「征韓論・自由民権論・封建論」が載ったのと同じ145号（1950年5月）に、「社会と歴史学とのつながり」と題する時評を書く。飯塚の『歴研』寄稿はさらにもう1回あって、それはさきに「世界史における日本の近代」特集で注目した253号（1961年5月）に掲載の動向「近代日本への関心—南アジア、西アジアの人々の場合」（この原稿実現には、じつは当時、東大東洋文化研究所で飯塚のいる部門の助手だった私がかかわった）。〈東アジア〉歴史像の提起には、1947年以来的こんな因縁も絡む。

日本社会の歴史意識に働きかける遠山の活動が、はじめて世の注目をひいたのは、飯塚浩二（1906-70）・仁井田陞（1904-66）が主宰した「東洋文化講座」であり、その準備・開始は、上記の飯塚・遠山間の交流のはじまりと一致する。たちまち、その記録が東大東洋文化研究所編『東洋文化講座 第1～第4』（白日書院、1948-49年）、として出版され、大きな反響を呼んだ。その内容は、

① 近代日本の特異性〔近代日本政治の特異性（岡義武）、日本の社会と自由主義（木村健康）、日本の民主化についての覚え書（飯塚浩二）〕／② 尊攘思想と絶対主義〔尊攘思想とナショナリズム（遠山茂樹）、絶対主義と農

民問題（服部之総）、日本ファシズムの思想と運動（丸山真男）、跋に代えて—東洋文化研究の課題と研究動向（仁井田陞）〕／③ 東洋的社会倫理の性格〔中国の近代と日本の近代—魯迅を手がかりとして（竹内好）、中国人と宗教（吉川幸次郎）、胡適と儒教（野原四郎）、東洋的社会倫理の性格—法意識と社会構造（仁井田陞）〕／④ 戦後のソ連社会〔戦後のソ連社会（福島正夫）

さらに同時期、やはり飯塚の音頭で、飯塚・仁井田・大塚久雄・村川堅太郎が編者となって（企画の星雲時代の1948年春には服部之総も参加していたが、病気でぬけた）、『世界の歴史』全6巻（毎日新聞社、1949-52年）を世に問うた。この種の歴史シリーズ物のはしりで、後世語り草となる絶大な社会的影響力を發揮した。ここでも、また遠山は枢要な役割を演じることとなった。各巻の執筆者を示すと、

① 歴史のあけぼの（江上波夫、板倉勝正、杉浦健一）／② 西洋（村川堅太郎、松田智雄、堀米庸三、大野真弓）／③ 東洋（仁井田陞、野原四郎、松本善海、増井経夫）／④ 日本（遠山茂樹、石母田正、高橋磯一）／⑤ 現代（江口朴郎、村瀬興雄）／⑥ 歴史の見方（上原専祿、村川堅太郎、仁井田陞、川崎庸之、飯塚浩二）

このようにして、遠山は、清新の気あふれる歴史研究者の最先端に立って、大学の歴史学の（ことに日本史の）アカデミックな組織・機構との関係では「主流」どころか「外野」的な位置にしながら、社会的に発言力の高い知的フォーラムの有力な一員となった。飯塚と親密につながるグループには、大塚久雄（1907-96）、川島武宜（1909-92）、丸山真男（1914-96）らがいた。大塚『近代化の人的基礎』（白日書院、1948年）が書店の棚に並んだ日のことは、私もありありと思い出すことができる。敗戦という破局は、国民全体に近代日本の歩みを批判的に反省させていた。羽仁五郎『明治維新—現代日本の起源』（岩波新書、1946年）はその気分をよく物語っている。天皇人間宣言、農地改革、主権在民、平和国家、……。大塚が公衆に呼びかけたように、日本人はこれから「近代」をきりひらいていくのだ、という感覚。言ってみれば、国民の多くが圧倒的に「講座派」的だったのだ。

吉田茂首相が全面講和を求める南原繁東大総長を「曲学阿世」と非難したように、「逆コース」に対す

る知識人の広汎な反発の圧力があつた。そのような風潮のなかで、近代史家たる遠山の役割はいちじるしく大きかつた。思想・信条・政治的立場の違いを超えて、知識・文化・教育・社会の活動のさまざまな分野の人々と協力する共同の空間をもつたことが、それ以後の遠山の仕事や発言の多方面での展開と持続力とを支えた。そのため、1950年代早々の遠山の姿が、遠山像を固定させる。遠山自身も、63年の跳躍が自分の生涯の転換点であることを特別には意識しないで過ごしたほどに。ただし、亡くなったあと、ご遺族からうかがつたところでは、生前「歴研委員長をやっていたときが、人生で一番楽しかつた」と漏らされたことがあつた由。

b) 「過去の人」観を生む「(戦後)歴史研究者」歴史への臨場感の喪失

◆なぜ、遠山記念シンポジウムで「明治維新」は正面からとりあげられないのか

主催者側でどのような事情があつたかは知らないが、シンポジウムのプログラムを見て感じるのは、(戦後史)意識に漬かりきつた歴史研究者の問題だ(板垣「(戦後史)批判」、永原慶二・中村政則編『歴史家が語る戦後史と私』吉川弘文館、1996年。また、同「われわれはほんとうに戦争の外側にいたのか」[戦後60年をどう見るか]、『世界』2005年4月、参照)。のっぺらぼうの「戦後」のなかに流行が移り変わる内輪の内向きの(戦後)歴史学。それを飾るために、ときどき欧米学界・思想界からの借り物を挿入。こうして「戦後歴史学」という幻をそれぞれに着服し吹聴しながら、「過去の人」を振り落とし忘却していく。いまなお(戦後)に安住する「明治維新」史研究者にとっては、遠山の「明治維新」史研究など、現在の問題意識からは遠くかすむ「過去の遺物」なのかもしれない。遠山を記念するとは、世界という場の日本で<sup>アクチュアリゼーション</sup>生起しつつある現実と向き合い格闘した一研究者の存在の仕方とその経路を、自分にひきつけ、照らしあわすことではないか。

◆日韓歴史家会議という場における「遠山茂樹」論

このシンポで上記のごとき歯脱け状況がおきる一方で、遠山の著作『明治維新』が近年、歴史家の国際対話の場で、議論の一点となるということもあつた。9.11事件後まもなく、2001年11月末ソウル

で開かれた第1回日韓歴史家会議において、だつた。現在も続く同会議は、「歴史認識問題」をめぐる日韓両国政府間の取り決めにもとづくものだが、日韓関係に主たる関心がある「日韓歴史共同研究委員会」とは異なり、国際歴史学会議[国際歴史諸科学委員会CISH]傘下の日韓の国内委員会が協力しあつて、毎年、世界史にかかわるテーマを自由に定めて共同討論する場となっている(運営委員は、宮嶋博史、木畑洋一、濱下武志)。第1回に限り、第二次世界大戦以降の歴史研究の状況をサーヴェイする報告を双方でしあつて討議するという形式がとられた。そこで日本史研究を担当した三谷博は、焦点をしばらく「戦後日本の維新史学——遠山茂樹『明治維新』の場合」という発表をおこなつた(この会議の記録は『1945年以後の日韓両国における歴史研究の動向」[報告書]日韓文化交流基金、2003年、としてまとめられたが、その後、三谷はこのときの自分のペーパーを三谷博『明治維新を考える』有志社、2006年、のなかに「Ⅲ. 維新史家たち」の一章「八遠山茂樹——『明治維新』に見る戦後日本史学」として収録している)。なお、同じⅢのパートに登場するのは、遠山のほかに、マリウス・B・ジャンセンと司馬遼太郎の国民史とである。

三谷は発言の冒頭、

「実は、私は戦後日本史学にとってはアウトサイダーである。戦後日本の歴史学は、かつて日本共産党と不即不離の関係にあつた歴史学研究会によってリードされてきた。私は日本共産党員でもなければ、歴史学研究会のメンバーでもない。……直接師事したのが共産党を離脱した伊藤隆先生や佐藤誠三郎先生であつたせい、いずれかと言えば反共産主義者と分類されて、……岩波書店や東京大学出版会などの講座ものに執筆を依頼されることは、ついぞなかつた……。……私の見解は「戦後」日本の歴史学界の多数派の意見ではない。……内部にいる人間には語れそうもないことを語りたい。それが、多分期待された役制であろうし、主流の内部にある盲点を見つけることは、今後の歴史研究の飛躍にとって不可欠の作業と思われる……。」

と心境を述べ、2001年から50年前そして三谷の生まれた翌年に刊行された遠山著『明治維新』が、いまもなお重要参考文献とされながら

「読まれているか」というと、そうは言えない。忘れられ

ている。……リストに生きているのは、……内容が現在の学界で広く承認されているということではない。……20世紀後半の半世紀の間、初期においてはドグマの支配、最近においては問題意識の欠如が維新研究を停滞させ、依然……本書を維新史の標準的なテキストの座に置き続けている……。」

と問題を指摘しておいて、本論に入る。「著者と時代背景」、「内容の要約」と進み、「モデルの特徴」では唯物史観に立つ同書の特徴的な難点であると三谷が考える5点を挙げ、「50年後からみて」において、遠山に欠けていたとする視点(将軍家や譜代大名、「公議」政体構想、武士身分の消滅、「復古」の観念など)こそ重要な研究課題だと示唆したうえで、つぎのように結ぶ。

「後世からの批判はたやすい。しかし、本書を通読してみて、その広汎な史料研究を基盤においた、大振りな思考の展開には、あらためて感銘を受けざるを得なかつた。いま、これに匹敵しうる、斬新な単著を著しうる維新史家はいるであろうか。少なくとも、私にはできない。日本史を世界史的普遍に対する特殊例とするのでなく、むしろ日本史のなかから世界史的な普遍を見出す仕事を、著者[遠山をさす]とは異なつた角度から試みてみたいと考えている。」

この発表に対して、韓国サイドからコメントしたソウル大学の<sup>キムヨンドク</sup>金容徳教授は、「日本での日本史研究の動向」には、韓国の研究者として傾聴することは多くあつても、通常の形式でのコメントはむづかしい、と前置きしたうえで、明治維新に限定して「動向」を語るとするなら三谷が遠山の代表作を選んだのはもっとも適切だつたと思うと支持したうえで、マルクス主義者と非マルクス主義者とを画然と区分することには疑問を呈し(いずれの立場であれ、そのような境界と関係なく、着実に仕事を進めてきた多数の研究者の営為が学問の基礎を固めたから)、マルクス主義の功過については、盲目的主唱者は論外だが、その方法論に立つ研究が明確な理論性によって歴史学の発展に貢献し、さらにそれへの批判的研究が日本内外で日本史研究を刺激し発展させた事実は、評価すべきだ、と述べた。そして、日本史全般にわたる最近の動向として、以下の5点について知見の開示を求めた。

①マルクス主義的な自生的・内発的発展論に修正を加える国際的契機論の現況、②歴史において被圧迫者の抵抗を強調する左派の見方に対して、1970年代半ばから流行した支配構造(国家体制史)や社会史(前近代の庶民生活史・常民史も)の研究が、どのように均衡のとれた歴史像の呈示につながつたか、③新経済史の影響下の人口史・都市史・自然現象や環境の歴史的考察への関心、④東アジアの視角(接触や比較という次元を超えて)から日本史を見直す動きが、新しい歴史像をひらく可能性をもっていることについて、韓国でも関心が高いが、その現況、⑤「他者性」の尊重(日本国内での地域史を豊かにするとともに、他国の歴史・文化の理解によって日本を見つめなおす)への研究関心と研究動向

三谷は、これに対してメモを作って回答したが、それも前掲の日韓文化交流基金の報告書に収録されている。そこでは、多くの具体的事例が紹介されたが、田代和生・荒野泰典による「鎖国」見直し、村井章介の環シナ海秩序論や倭寇多エスニック理論、網野善彦の漁民の国際性や東日本・西日本の地域差などが例として挙げられ、三谷自身が『地域史の可能性——地域・日本・世界』(山川出版社、1997年)、の編者であることも明かされている。そして回答で非常に重要なのは、「国際的契機の内在性あるいは秩序や境界の重層性」というアイデアが明示され、それはペーパー本体の最末尾、すなわち

「日本史を世界史的普遍に対する特殊例とするのでなく、むしろ日本史のなかから世界史的な普遍を見出す仕事」という目標と共振しあうのだ。

こうしてみると、遠山『明治維新』批判は、疑いようもなく遠山の『東アジア』歴史像提起の本来の動機づけと一体化しているではないか。これが明らかになるよう導いたのは、賢者にしてバランスの取れた歴史家たる金容徳の討論だつた。遠山の内的展開は、日本の歴史学の内側に1960年代半ば以降の変化を人知れず促していただいだけでなく、21世紀を迎えたソウルで、(東アジア)歴史像探索の国際対話実践の場に三谷博が持ち出した遠山論を機縁として、人知れず、遠山自身も知らず、発表者も自覚しないまま、解説され共有化されることになつたのだつた。

なお、維新史家としての遠山に対する三谷の批判について、私として気になることのうち、ここで1

点だけ触れておきたい（前記の〈戦後〉意識の問題と関連するので。「講座派」の問題意識や「絶対主義」概念に関連する批判についてだ。三谷は、遠山が

「現実の諸情勢は、恐慌の惨禍に悩む勤労民衆の生活を憂い、戦争を指向する軍国主義にたいする抵抗を志す良心的インテリゲンチヤをして、日本資本主義発展の普遍的法則と特殊的具体の学問的分析へと激励した」

というのを受けて、

「問題は、この昭和史に関する観察を、そのまま維新期に遡行適用するのが適切か否かという点にある。たった70〜80年前のことだったとしても。」

と言い、また

「著者の維新解釈には、昭和史のイメージを遡行して投影した面が多分にあり、昭和におけるファシズム化や対外侵略が維新の当初から必然として内包されていたと言わんばかりである。この点で、「絶対主義」という言葉は、天保期と維新时期と昭和期を必然の相で結びつける機能を果たしていると見ることも可能」

とする（三谷博『明治維新を考える』202-203頁）。アジア太平洋戦争の敗戦後をナマナマしく記憶する私にとっては、1950年生まれの歴史研究者によるこうした率直な時間意識の表明に接して、これほどの歴史（時間）意識の変化をも緬い交ぜにして成り立ち持続している〈戦後〉感覚に、一層の興味（ないし奇異の感覚）をそそられるのだ。そうして、ますます「新しい」歴史家たちによって書かれるであろう「歴史」にも、予感として。一抹ならぬ不安を持って。

「昭和史を維新期に遡行させているのではないか」という三谷の批判の問題性は、天皇制の把握の問題とかかわっており、また、既に述べたように「天皇制つき資本主義」の現実肉薄しようとして苦闘した「講座派」の評価の問題ともかかわってくる。歴史学を学ぶうえで「歴史への臨場感」ともいうべきものが問われるが、「遠山は昭和の経験を明治に当てはめたのだ」といった反応が出てくる背景には、この臨場感の喪失があるのではないか。野呂栄太郎『日本資本主義発達史』（1930年）は、もともと彼の日本労働学校などでの講義を1924-25年に執筆したもので、といった事情の詮索など、いまさら問うまい。「講座派」にせよ「労農派」にせよ、維新後の時代を生き、維新を問い直し続けた人々であって、「昭和」

人ではなかった。遠山は、幼児のとき（1910年代）毎晩、おばあさんの「ご一新」物語を子守唄がわりに聞いて眠りについたとのことだ。

### Ⅲ 大震災・原発事故のもとでの歴史「学」――〈東アジア〉歴史像からの発展へ――

紙幅が尽きるのが気がかりだが、最後に、この問題を考えるうえで重要と思われる着眼点を、一部分はキーワードの形で示していきたい。

■「同時代」（=いかなる時代を生きるか）の選びわけ 〈アイデンティティ複合〉

宇宙誌・地球史・生命誌・環境史・災害史  
ユーラシア・プレート、北米プレート、太平洋プレート、フィリピン海プレートの押し合い  
「破局」体験 1945年と2011年

「大本営発表」・「真相はこうだ」・「一億総懺悔」  
「電事連・原子力ムラ・安全委」・「内部被曝」・  
「脱原発依存」・「がんばれ日本」・「絆」  
「日本〔人〕は、戦中・戦前・さかのほれば明治維新以来、ほとんど変わっていない」（ある日本近代史研究者からの年賀状の一節）。

日本社会の「無責任体制」にかんして、歴史的には、それをどれほどの時間的幅で問題とすべきか。

10<sup>11</sup>（ギガ・メガ・テラ規模）年さきの未来  
放射性物質とのつきあい、「水」・「食」  
■「いかなる地域・いかなる世界を生きるか」の選びわけ 〈n 地域〉

\*板垣「組み換え自在の〈地域〉を生きる」、『飯田市歴史研究所年報』⑥、2008年、参照。

残留、避難、移住、家族・コミュニティ解体、差別と格差、新しいコミュニティの獲得  
反核・反原発や放射能汚染などにかかわる共同性で結ばれる「地域」

オーストラリア・インド・イラク・ヨルダン・クウェート……〔地球大に拡張〕

市民決起・市民革命で結ばれる〈地域〉  
自由民権運動研究の新機軸 〔21世紀「ムワーティン革命」につながる視野〕

武藤類子の発言と関心（武藤類子『福島からあなたへ』大月書店、2012年）

服部之総「加波山」（『黒船前後・志士と経済：他十六篇』岩波文庫）中の河野広中観

■「アジアにバラケた日本」への視座

特に重要であり、またまさしく〈東アジア〉歴史像からの発展のあり方を考えるという意味でもヒントになると思われるのは、濱下武志が提起する「アジアにバラケた日本」という視座である（石井米雄編『アジアのアイデンティティ』〔山川出版社、2000年〕所収「座談会〈アジア〉とは何か――論理の錯綜を解きほぐし、未来を描き出す視座を探る」22-23頁の濱下発言）。

「……明治維新のときの戊辰戦争にさいして、東北、北陸の諸藩が結成した奥羽越列藩同盟と薩長の勢力がぶつかり、北の同盟は内部崩壊をきたしたために、あたかも近代日本が西南雄藩のみの歴史であるかのようにとらえられ、東北地域とアジアとの関係が視野の外におかれています。その結果、東北出身の知識人が、たとえば後藤新平のように、台湾と東北人との関係を重視したということも見逃されがちです。あるいは、その後の自由民権運動に失敗した人たちが、大陸に移ったということも地域的な文脈です。そういう事実によってみますと、日本のなかも地域的に非常にばらけていて、アジアとのかかわりもそれぞれの特色をもっていることがわかります。現在の朝鮮半島の問題にしても、日本のいろいろな地域で、それぞれのかたちでつき合いがあったことを忘れて、あたかもそうでないような、一元的な処理をしようとしすぎていると思います。もう少し、日本もアジアに向けてばらけたほうがいい。」

この考えは、濱下武志『沖縄入門――アジアをつなぐ海域構想』（ちくま新書、2000年）としても展開する。

私、板垣が市民・科学者国際会議（2011年10月12日東京、市民放射能測定所〔福島〕が主催）でおこなった発言の敷衍記録（板垣「フクシマ原発事故をかかえこんだ世界、そうさせた日本」、CSRP 市民科学者国際会議実行委員会編『2011年10月12日市民科学者国際会議～放射能による健康リスク』2012年6月、76-85頁〔入手方法などの問い合わせは、メールアドレス info@csr.jp または電話024-573-5697 まで〕）の関係箇所を、以下に挙げる。

義和団鎮圧の北清事変で北京に籠城した柴五郎（青森〔本来は会津〕出身の軍人）が国際的名声をかちえたのをはじめ、中国知識につうじた軍人・行政官・文人・フィクサー・大陸浪人など数多の「中国通」を輩出した。

岩手県水沢から出て須賀川医学校（福島県立医科大学の源流の一つ）に学んだ後藤新平は、遅咲きドイツ留学ののち、内務省衛生局長、〔日清戦争帰還兵〕臨時陸軍検疫部長官、台湾民政長官、満鉄初代総裁、拓殖大学総長、内相・外相、東京市長、関東大震災復興／鉄道／放送／事業などの総裁を歴任、輝かしい足跡を残す。台湾調査事業では「生物学の原則」を強調。後藤が米国からスカウトして台湾に招き、のち国際連盟事務次長となる新渡戸稲造は、盛岡出身だが、専門は農学で、日本の植民地経営・植民政策学の礎を築いた。東北人のアジア進出では、知の技術／科学的識見／が活用された。

\*上記以外に、曾根俊虎（1847-1910）、石川伍一（1866-94）、鈴木一馬（1873-1961）、町野武馬（1875-1968）、工藤忠（1882-1965）や、山田良政（1863-1900）、金子新太郎（1865-1911）などにも、注目している。軍事探偵石川は日清戦争で清軍に銃殺され、山田は孫文の革命軍に身を投じて惠州蜂起で捕虜となり処刑され、金子陸軍大尉は辛亥革命に参加し漢陽で戦死した。

\*河野広中は、1909年、日本滞在中のアブデュルレシト・イブラヒム〔ロシア帝国下タタール人ムスリムのリーダーで、ユーラシアのチュルク系諸民族（彼の眼には日本人もその一部）の結束を旨とした人物。のち再び来日して東京代々木上原のマスジドのイマームとなり、1944年日本で死去〕の存在を中軸に据えて、大原武慶を会長とする「亜細亜義会」が設立された際、犬養毅・頭山満・中野常太郎とともに設立発起人となる。

■「戦後」史批判の新展開

敗戦・降伏という1945年の破局以降、現在まで、改変・再編や再定義を経て変遷しながらもちこされてきた日本国家の対米従属が、日本社会にとって、まったく異常な未曾有の経験の持続であることは確かだ。これを一括して「戦後」（平和主義・民主主義の時代）ないし「日米パートナーシップ・同盟の深化」と観念する社会意識の醸成・誘導が、従属システムとそのキメラ的構造化（変貌をつねとする危機管理グローバル戦略やそれへの適応・適応志願とリンクする軍事基地や原発・核施設の偏在立地、雇用やリスク負担の不正な拡大など、社会的また地域間の格差・差別の激化）を支えてきた。ここでは、外交的・経済的圧力、密約・暗黙了解などの闇取引、利益誘導の買収工作、

日米コネクションの構築強化、水面下の情報操作・謀略活動もさることながら、むしろ、そうした現実に対して自発的に、したがって内面的にも、身をゆだね迎合し受容する社会的風潮（歴史的に形成された精神風土の一側面と大衆化状況との結合）の作用が顧みられなければならない。「在日」や沖縄や先住民族や女性の立場からの眼がこれへの鋭い批判にかかわるのは当然として（まず念頭に浮かぶのは、<sup>キムシジョン</sup>金時鐘、<sup>キムツン</sup>金贊汀、新川明、川満信一、萱野茂、大林道子らの仕事）、観察・思索や発言・行動の面でこの問題に正面から取り組んできた（ときに内攻や屈折も不可避として）のは、歴史研究のいわゆる「専門家」であるより、作家・評論家・科学者・法律家だった（たとえば、広津和郎・宇野浩二〔松川事件〕／松本清張〔『日本の黒い霧』・『昭和史発掘』〕／伊達秋雄〔砂川事件で日米安保条約につき〕・福島重雄〔長沼ナイキ基地訴訟で自衛隊につき〕違憲判決／熊本大学医学部研究班・石牟礼道子〔水俣病〕／江藤淳〔敗戦と日本の言語空間〕／小野周・野間宏〔原発モラトリアムを求める会〕／加藤典洋〔『アメリカの影』・『敗戦後論』〕／大江健三郎〔沖縄戦裁判〕、など）。2011年3.11以後の歴史研究者は、あらためて災害史などに目は向けても、こうした「戦後」意識・システムへの批判への取り組みは、なお立ち遅れているようだ（私としては、4月那覇でのシンポジウム「恋人のように!!「東アジアへ」——〈併合40-1〉琉球群島から、今、呼びかける」〔\*川満信一『沖縄発——復帰運動から40年』世界書院、2010年、刊行記念〕／6月大阪での吹田事件研究会の「吹田事件59周年の集い」〔\*西村秀樹『大阪で闘った朝鮮戦争——吹田枚方事件の青春群像』岩波書店、2004年、参照〕／10月東京での市民放射能測定所〔福島〕主催「市民・科学者国際会議：放射線による健康リスク～福島「国際専門家シンポジウム」を検証する」、などで、講演・発言をおこなった）。この段階でも、依然として、歴史研究者は、みずからの課題を見定めるために以下のような仕事から学ばなければならない。

\*武田徹『私たちはこうして「原発大国」を選んだ』中公新書ラクレ、2011年〔『核』論——鉄腕アトムと原発事故のあいだ』勁草書房、2002年、のち中公文庫、2006年、の増補版〕。

\*吉岡斉『新版 原子力の社会史——その日本的展開』朝日選書（883）、2011年〔旧版は朝日選書（624）、1999年〕。

\*有馬哲夫『原発・正力・CIA——機密文書で読む昭和裏面史』新潮選書、2008年。

\*同『CIAと戦後日本——保守合同・北方領土・再軍備』平凡社新書、2010年。

## おわりに

4年前刊行された初版に対するさまざまな批判に応えて改訂された遠山・今井清一・藤原彰『昭和史〔新版〕』（岩波新書、1959年）は、冒頭、「アジアの唯一の帝国主義国」をめざした日本が第一次世界大戦をへて世界の強国と自他ともに許すまでになったと言い、末尾では、日本国民が、「アジアの一員」として、すなわち他のアジアおよび世界の諸国民に対する責任・任務として、平和と民主主義の歴史をつくりだす、という課題を示して結ぶ。だが、新しい歴史をつくりだす力の根源は戦争の歴史・戦争の責任を明らかにすること、と述べるだけで、「アジアの唯一の帝国主義国」から「アジアの一員」への転換の道筋が読者に明示されたとは、かならずしも言えなかった。

遠山らの初版が出た年にアフガニスタン調査から帰国した梅棹忠夫は、1957年初め『中央公論』誌上に「文明の生態史観序説」を發表、「『昭和史』論争」をよそに空前の反響を呼んだ（それを中軸に関係論文を集録したのが、梅棹『文明の生態史観』中公文庫、1974年）。日本文明を西欧文明とともに「第一地域」として「中国、東南アジア、インド、ロシア、イスラム諸国、東欧」を包括する「第二地域」に対置しながら、主体と環境の相互作用の集積が生活様式の遷移<sup>サクセッション</sup>をもたらす視角から世界史を見、「よりよい暮らし」の希求を現代世界の普遍原理ととらえる立場を打ち出した。これにただちに積極的に反応した廣松渉は生態学的遷移と生産物交換の役割を考察する（廣松『生態史観と唯物史観』講談社学術文庫、1991年）が、梅棹の本がひろく社会の日本観・アジア観に与えた影響は大きい。

他方、遠山らが『昭和史』の改訂新版に取り組んでいたとき、MITで経済史を教授しアイゼンハワー大統領のスピーチライターも務めたW.ロストウは*The Stages of Economic Growth: A Non-communist Manifesto*, Cambridge U.P.,1960（木村健

康・久保まち子・村上泰亮訳『経済成長の諸段階——一つの非共産主義宣言』ダイヤモンド社、1961年）を執筆していた。これは東南アジアなどにおける「低開発国開発援助」・「近代化政策」に理論的基礎を与えただけでなく、ヴェトナム戦争を含むその社会的現実を規定していく。さらに、これへの批判は、やがてラテンアメリカ・アフリカ・アジアの政治経済・社会・文化をめぐる理論化と政策実践のなかから、「先進国」の経済発展と「第三世界」の低開発とを統合的に考える「従属理論」や「世界システム論」

の登場を促すことになった。だが、日本では、そのような展開にはるかに先んじて、江口朴郎の「国際的契機」論を知っていたのである。

遠山の「東アジア歴史像」が新しい打開のヒントとして提出されたのは、このような状況のもとで、だった。それから50年後が目前に迫るいま、あまりに古めかしく、かつあまりに新しい世界的現実のもとで、歴史理論・歴史記述・歴史教育の革新にむかっの決然たる飛翔が求められている。